
漫界のニグラス

雨永祭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

浸界のニグラーズ

【Nコード】

N7498L

【作者名】

雨永祭

【あらすじ】

アザトースに逆らった旧神たちは打ちのめされ、地球へと逃げ込んだ。そこで、旧神たちは力を蓄えつつ眠りに着く。その後訪れたニグラーズの子らと旧神との戦い。人類は巻き込まれ、その果てに人類は異形の神々に対抗するための兵器 鍵機を造り出す。今、人類と旧神の戦いが始まる。ハートフルボッコで熱血にできたらしいと思う触手ロボットたぶん恐怖小説、始まりませう。

題辞 手記

人間という存在がいかに矮小で、脆いものなのか。

そのことは、今となつては誰もが感じていることだろう。

全てが終わり、世界は以前の姿を取り戻してはいるがそれは表面上のことではなく、その本質は変わってしまった。

地球という小さな世界で、何者も寄せ付けることなく。内へ内へと向かっている。人間という種族が持っていた、外界へと向かう勇氣や気概というものは摩耗してしまったのだろうか？

もしそうであるのなら、私はそれが残念でならない。

確かに我々人間は蒙昧なる神にある意味、打ち勝つたはずなのだ。だというのに……。

しかし、私一人の力では足りない。仲間と共に訴えたとしても、伝わらない。

あまりにも、力不足だ。

それに、私も仲間たちも疲れてしまった。英雄たる彼女に至っては、すでに壊れてしまっている。

だから、私はここに書き記す。

後の世に、この手記を見た人が、行動を起こしてくれることを願つて。

題辞 手記(後書き)

やっちまった……。。

第一部 The call of the priest 序章へ胎動篇

完全にぶっ壊れている気がする主人公ですが……ってか、やり過ぎた感が否めない主人公ですが、生ぬるく、見守ってくれると助かります……。

というか、なんかすいません。

微工口注意っす！

私という人間は実にやくざな人間だと思う。勉強、運動、人間関係、どれをとつても人並み以下。当然、機械音痴。何をやらせても愚図で鈍間。時間を掛けていいのなら、人並み位の事は出来るけれど、そんなことが出来るはずもない。時間がかかってもいいのならそれなりのことは出来ると思つてはいる。でも時間がかかつては周りに迷惑をかけるし、物事は早い方が好まれる。とにもかくにも、自分のダメさは良く分かつているし、そのことで他人に色々言われても、それが事実だから私はそれを受け入れる。受け入れるからといって、それで私が傷つかない訳じゃないから、なんとも言えないけれど。

それがいやだから、私はダメなりに目立たないよう気を付けている。

傷つくのは嫌いだし、他人が私の心に踏み込んでくるのも嫌いだ。だから、勉強だ何だとかがんばるよりも、私は他人と一線を引くことに全力を傾ける。

逃避をして何が悪いの？

麻ヶ野三末の独白より

学校の帰り道。今日もいつものようにみんなに馬鹿にされた。私は笑っていたしみんなも笑っていたけれど、酷く、憂鬱な気分になるのはどうしようもない。これだから人間は嫌だ。胸糞が悪くなる人は、他人の心なんて理解出来ない。私も含めてそれは同じだ。

帰ろう、早く。早く一人になろう。

そう思った時、目の前の空間が爆ぜた。吹き飛ばされてしまうか

と思うほどの風が私を襲う。唐突過ぎて訳が分からない。頭を下げて体勢を低くする。

「風が止み、顔を上げる。」

「え？」

巨大な肉塊がそこにはあった。

二階建ての家屋程の大きさの生物。

圧倒的な存在感。まるで自分がゴミ屑か何かと錯覚する。なんて私は矮小なのか。

肉塊はうごうごと蠢き、体から数十、数百、大小／形状様々な蛸の足のような、あるいは私の好きなゲームに出てくる触手のようなものを周囲に伸ばしていた。

その姿は、とても神秘的だった。

その姿は、周囲を探っているようであり、助けを求めるようにも見えた。

その姿は、私の何か 母性が、はたまた単なる好奇心か を触発した。

徐々に私の方にも伸びてくる触手。私はそれにゆらゆらと近寄っていく。私の表情はだらしなく緩んでいた。手を伸ばす。

望んでいるものが、そこにある。

近寄って、触手の様子がよく分かる。灰色がかった粘液が触手全体からとめどなく溢れだし、黒い肌をテラテラと濡らしている。粘液は、ダラダラと涎のように落ちては地面を汚し臓器のようになっている。匂いは饴えたような、それでいて花のように甘く芳しい香り。

堪らない。

自分の理性がこれほどまでに頼りないものに見える。

それではダメだと理性は叫び、それで良いと欲望が吠える。

私は、さらに大きく一步を踏み出し、触手に触れる。

「ふひ」

思わず、変な笑いが零れた。ぶよぶよとした水風船のような感触

と肉のような手触り。生温かい粘液は驚くほどに粘度は高く、手に絡みついてくる。

気付けば手に絡み付き、触手は腕を這ってくる。

想像が、空想が、妄想が、欲望が、膨らむ。

勢いよく空気を入れられている風船のように急速に。理性と言う皮膜はどんどん薄れていく。

影。

烈風。

衝撃波。

視界を覆う真っ黒な巨体。

私は、ゴミのように宙を舞う。

あは。あははははははははは。

それが妙におかしかった。

パチャ、という水音が耳に入る。

私は、一面の灰色の海の上に座り込んでいる。いや、灰色というには少々グロテスクに思えるかもしれない。濃淡様ざまにマーブル模様が浮かんでいる。

なんだここ？

疑問と同時に気付く。

灰色の海は一面のキャベツ畑。およそ二十センチほどの大きさの塊の列。

「え？」

思わず声が出た。視線が合う。キャベツが私を見ている。

違う。あれは。頭だ。

この海には頭が生えている。空ろな顔。あたり一面の顔、顔、顔。

ここは灰色の顔の海。

理解した途端に、世界は色鮮やかに変わる。

赤／黒／茶／青／紫／桃が絢交ぜになり、頭以外に浮んでいるのは色とりどりの壊れかけた内臓。

それは、臓物の海。

ゾクリ、と全身の毛が総毛立つ。

視線。

頭が私を見ている。

次第に生温かいウミウシか何かのようなヌチャヌチャとした感触がえらく生々しく、下半身で感じられる。疑問に思い自分の体を見る。私の服はそのほとんどが用をなさない布切れと化し、下着も同様。

顔たちは穴が開くほどに私を凝視する。それはもう視姦と言っても良い。

ふと、耳に音が届く。

酷く外れたフルートの音とそれとずれて打ち鳴らされる太鼓の音。賑やかな不協和音。

不協和音は上から降り注いでいる。

見上げる。

「アヒ」

唇から、笑いが零れた。

絶景。暗い昏い空に浮かぶ触手の塊。音はそこから出ていた。

私は笑う。

何故かはわからない。でも、たまらなく愉快なのだ。

パンパンパン、と太鼓の拍子に合わせて手を叩く。

触手の塊は次第に高度を下げていき、目の前に止まる。見上げたところで頂点が見えない。

体も揺らし始めていた私に、触手が伸びる。

入ってくる。

私の穴という穴に。探るように。

私はされるがままに。

あひ、あひひゃひゃひゃはふや、と狂ったように笑う。
体を揺らし、手をたたく。

触手は容赦なく。

消化器官を勢いよく突き進み、眼球を抉り、眼底を蠢き、肺を隅々まで舐り、耳を貫き、三半規管を揺らし、子宮を満たし、脳髓を弄る。

痛いとか苦しいとか楽しいとか気持ちいいとか気持ち悪いとかそんなものを通り過ぎて。

私は、ひたすらにけらけらと笑い続けた。

不意に、触手は動きを止めた。

「？」

体が崩れ落ちるのが分かった。

なぜ？

分からない。

触手に触れる。

どうしたの？

動かない。

ズルリ、という触手が私から抜かれる音が体中に響いた。

どうして？

もう、なにもわからない。

目覚めは最悪だった。自分がどんな夢を見たのかということよりも、触手が私から引き抜かれたことの方が私の気分を最悪なものにしていた。どうして、触手は、あの子は、私から離れてしまったのだらう？

ショーツに触れると、酷く濡れていた。

「ぶっ……」

体の奥は酷く火照っているのがわかる。
もう、止まらなかつた。

朝も早くから私は一体何をしているんだろう？

しばらく自己嫌悪に苛まれた後、私はようやく動き出す。

身だしなみを整えた後、制服に着替える。

エプロンを付けて、冷凍庫から冷凍食品を取り出す。それをレンジに入れて弁当箱に詰め込めば、昼食用の弁当が完成する。そのあとは、朝食分の食品を解凍すれば朝の日課の九割が終わる。

食卓に座ってテレビを付ける。そこで流れていたニュースに、手を止める。それは、酷く近所の、私の登下校の道だった。滅茶苦茶になってしまった見慣れた街並み。家は潰れ、道は碎け、飛び散った赤が瓦礫を染める。

驚いた。ここまで酷いことになっていて、私はあんなことをしていたの？

ため息を一つ。

空いた食器に水を入れ、鞆を手を外へと出る。

本当は嫌だけれど、でも、学生だから。

義務だからと言いついて聞かせて出たその先は　　。

「え？」

昨日までとはまるで違う世界だった。

戦場と見紛うような光景。それは、あまりにも日常からかけ離れていた。何がどうしてこうなったのか。

訳のわからないままに、見慣れていたはずの街並みを歩きだす。

嫌味なおばさんのいた向かいの家は瓦礫の山になっている。三軒先にあるいじめっ子の少年の家は半分が崩れていた。その隣にあるク

ラスメイトの家は完全に崩れ去り、誰のものか分からない脚が顔を覗かせている。そんな街並みの中を、自衛官や救命救急の隊員、テレビ局の集団などが忙しなく動きまわっている。ずいぶん昔にあった大地震を彷彿とさせる光景だった。

ただふらふらと、学校を目指す。混乱から逃げるように、心を落ち着けるように。日常と同じ行動。そして、学校で待っていたのは山羊のような蹄と蛇のようなものが付いた泡を噴き出す黒い樹木の集団と、それを次々と産み落とす、『何か』。

その『何か』から、目を離すことが出来なかった。『何か』が私の心の穴にすとはまった感覚。私が求めていたものは。憧れは。私が私である存在証明は。

私の全てが目の前光景に詰まってる。そんな確信。根拠なんて無い。とにかく、私は理解したんだ。私は『何か』だ。この奇妙な生物を生み出す、『何か』なのだ。やっと見つけた。

私の、素敵な、ステキな、私だけの長所。
嬉しさに、頭が爆発しそう。

そうして、私の頭は、破裂した。

目覚めは、素敵だった。自分が見たあの夢は、私が私である理由。私の存在証明をしてくれた。たとえ夢でも、今までこんなことなかった。いつになく、上機嫌に、そしてすっきりとした気分で、私はベットから出て身だしなみを整える。気分が良いから今日は気合いを入れよう。念のため、時計を確認すると、まだ五時。予想以上に早く起きてしまったようだ。でも、これなら、ばっちり気合いを入れることができるだろう。ゆっくりと、時間をかけていいなら、私

は存外、色々出来る。だから、今日は少し化粧をしていこう。髪も、久しぶりにセットしよう。私だって女の子。着飾りたいという思いはある。ただ、私の鈍間さがそれを許してくれないだけ。

きつと今日は良い日になるだろう。

二時間かけて化粧を施す。ケバイのは嫌いだからナチュラルメイク。

そのあと、さらに一時間かけて髪をセットする。後ろ髪をまとめて、アップにしてみた。

流石に、もう出ないといけない時間だ。

気分も良いし、一食くらい抜いたって構わない。昼食はコンビニでパンでも買おう。普段からは考えられないほどにポジティブになっている自分にクスクスと笑いをこぼし、鼻歌交じりに家を出た。

きつと、良いことがある。

空は、私に應えるかのように青く澄み渡っていた。

い、いかがでしたか？

とりあえず、これからも、ごりごりと精神ポイントを削っていく所存です。

あと、くとうるーさんの知識についてはにわかでもいいところなので「容赦を。触手が……書きたかったんです……」。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7498/>

漫界のニグラス

2010年10月9日13時38分発行